
くもくも病

独マサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

くもくも病

【Nコード】

N3527D

【作者名】

独マサ

【あらすじ】

他愛もない大学生のとある一日のお話。

ある春の日差しが温かく、眠くなりそうな正午だった。大学の講義に行こうとワnlームのアパートの我が家をでる。駐輪場になっっているスペースにはオレンジの原付が置いてある。カバンを原付の足を置くところに乗せようとしたら、花壇に何かが垂れ下がっていた。よく見ると細い蜘蛛の糸だった。

顔を近づけ、ぼーっと眺めていると、糸の先には小さな蜘蛛が体から糸を出して、蜘蛛の巣を補修しているように見えた。草の生えているところに手の甲ほどの蜘蛛の巣があった。

蜘蛛は何食わぬ顔で（もし顔に表情があったとしたら）、作業を進める。時に立ち止まり、時に二重三重にしようと糸をすべるように行き来する。

時間をもてあましている大学生の僕は蜘蛛を観察することに何の躊躇もない。

アリは勤勉だと聞くが、蜘蛛もなかなか働き者のようだ。

少なくとも、講義があるにもかかわらず、太陽の陽光が気持ち良いという理由や蜘蛛を観察する用事ができたので講義にいかない。そんな僕よりはましであろう。

そう思ったら、顔が少しにやついた。

『蜘蛛は臆病だ』

と誰に聞いたか忘れたが、ふとそう思い出した。

なんとなしに細い糸を指先で引っ掛け、揺らしてみる。

その瞬間。

蜘蛛の糸が驚くほど振動した。一瞬なにごおったかわからなかったが、蜘蛛は巣の中央部分にむかって逃げ帰った。

これは凄い。あまりの糸のゆれ具合に意表をつかれた。

もう一度、糸を少しさわって揺らしてみる。

おそろしいほど振動する。蜘蛛の巣全体が大きく揺れ、糸がぼやけ

てみえる。びっくりしているのだろうか、警戒のためなのか、とにかく蜘蛛が揺らしているのは間違いない。

蜘蛛の糸か……すげえ。感嘆のため息がでた。

蜘蛛がどんな風にえさを捕るのか、糸に絡まった虫をどう食べるのか。僕は興味を持った。

急いで部屋に引き返し、ビニール袋と割り端を持って蜘蛛との勝負に挑んだ。箸をくるくると回しながら糸ごと強引に蜘蛛を捕まえる。蜘蛛は慌てふためきながらも逃げ場はない。

「蜘蛛。討ち取ったり！」控えめの声で言葉を発する。ふっ弱小だ……。

捕まえた蜘蛛を箸ごと袋にいれテープで先の方を止めた。窒息することはないよな？ かけらほどの同情心で心配をしてみる。まあ大丈夫だろうと思ひ、ポケットからタバコを取り出し火をつける。

深く吸い、煙を吐き出す。

回転の鈍い頭にひらめきが流れた。

ああそうだ——虫カゴってまだ売ってるかな。

あごを少し上げ煙を上に向かって吐き出すと、白いもやが風に揺られてどんどん薄まっていく。細く長くなりやがて消えた。空にはふわふわの雲が気持ちよさそうに浮かんでいた。ふと、僕はこの状況に納得がいった。

これが五月病ってやつだな……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3527d/>

くもくも病

2010年12月25日02時06分発行